

第31回 パリ国際アマチュア ピアノコンクールにて、 山崎翔さんが第3位に

取材・文/船越清生



山崎翔

蘭成中学・高校を経て、東京大学工学部卒。ハーバード大学ケネディ行政大学院にて公共経営学修士、MITスローン経営大学院にて経営学修士課程を修了。現在パリのOECD環境局に勤務。これまでにピアノを浅賀雄三、川添聖希、Timothy McFarland、Jean-Marc Luisada、室内楽をDavid Deveaux、Jean Rifeの各氏に師事。2021年にラファエリ国際ピアノコンクールJAPAN A部門第1位、およびロシア作品賞を受賞。

30年以上の歴史を持つパリ国際アマチュアピアノコンクールは、数あるアマチュアコンクールの中でもひととき高い知名度を誇っている。今回は、世界32カ国より92人がエントリー。4月2日の最終審査では、6人のファイナリストたちが極めて完成度の高い演奏を披露した。パリの経済協力開発機構(OECD)に勤務する山崎翔さんは、フォーレの『ノクターン第6番』とメンデルスゾーン『幻想曲作品28』を演奏。鮮明な音の粒立ち、幅の広い音域、緻密さと歌心で魅せ、第3位に輝いた。コンクール後、山崎さんにお話を伺うことができた。

——子どもの頃からピアノが好きだった

たのですか？

母から手ほどきを受け、小学校の頃は近所のピアノ教室に通っていました。当時は、祖母から習っていた書道の方が好きだったので、唯一面白かったのがバッハでした。算数が好きだったので、その規則性やバズルを思わせる構成に惹かれたのだと思います。先生のお言葉のように、練習曲や古典派の曲にももっときちんと取り組んでおけばよかったと、今は反省しています。

——東大では室内楽にも打ち込まれたとか。

アンサンブルから学んだことは非常に大きいです。ソロばかり弾いている

と、細部の技術的なことにこだわるあまり、より大事なグローバルな視点が失われてしまうこともあります。その後も、アマチュア音楽家の友人たちとの交流から学ぶことは多いです。私の母校の蘭成中学・高校には、現役とOBによるピアノ愛好会があるので、医師や弁護士等多忙な仕事の合間を縫って高い完成度で作品を持ってくる他出演者からは常に刺激を受けます。この会は角野隼斗くん、嘉屋翔太くんなど、現在プロとして活躍する素晴らしい才能も輩出しています。

——アメリカ留学中にはMITの音楽コースにも在籍されていましたね。

このコースでは、ジュリアードやニューイングランド音楽院出身の先生に師事できます。McFarland先生の指導法は、全体の音楽の評価から始まり、提案しながら改善へと導くもので、「君はなんでも弾ける」と励まし背伸びした難曲にも取り組ませてくさいました。またハーバード大学のセミナーで、鍵盤楽器奏者・音楽学者のロバート・レヴィン先生に出会ったことも忘れられません。

——お忙しい毎日、どのように練習時間を確保されていますか？ 奥さまのサポートもあるかと思えます。

妻の母がピアノの先生なので、鋭い耳を持つ彼女の助言は貴重です。率直

なフィードバックに感謝しています。また、私は楽曲分析や曲に関する文献を読むこと、そして選曲する過程が好きなのですが、練習時間が限られているからこそ、そういったピアノを弾く前の準備がとても大切だと痛感しています。自宅では、中古のブレイエルのアップライトで弱音器を使っており、楽譜からの情報、得た知識を音で実際に表現してみるという意識で取り組んでいます。

——ご自身の人生やお仕事において、音楽の影響を感じることは？

実際にアウトプットする前に、「構成」や「伝えたいメッセージ」を頭の中で明確しておくことは重要ですが、これはいかなる文章・資料の作成やスピーチにも当てはまります。また、複数の曲を目標の演奏会までに仕上げるといったプロジェクトマネジメント力も仕事に自然と活かしています。言語を越えて、人と人をつなぐのが音楽です。現在2歳の息子がいるのですが、よりグローバル化が進んでいく社会で、彼も言語や文化の問題に遭遇する時期が来るでしょう。そんなとき、芸術やスポーツなど、人間としての幅を広げ、人の輪を広げてくれる世界があれば、その人の助けや強みになると信じています。私にとって、音楽に寄り添うことは人らしく生きることで、人生の財産そのものなのです。